

## 解題 福岡武男氏が生きた時代について

白井 千晶（生殖の社会学）

「性科学」「青年運動」「性教育運動」という言葉は、現代の人びとにはなじみがないものかもしれない。だからこそ、福岡武男氏の著作は、歴史的資料として復刻されることになった。ここに簡単ではあるが、福岡氏が活動した時代を述べておこうと思う。

「性科学」自体は、明治の開国を契機に始まった。いわゆる「開化セクソロジー」は、さまざまな回路をもっていて、解剖学的な用語を用いた科学的体裁をもつもの、江戸時代の春画の流れをひく色情趣味的なものなどがあつた。これらはその後、性愛の一致など近代的な性愛感・家族観を帯びながら「健全な性」を主張するようになり、福岡武男氏が青少年時代を過ごした一九二〇年ごろには婦人雑誌などにもおおらかに性が語られるようになった。一九三三年には翻訳本『性教育』（M・ストープス著、家庭研究会）、一九三六年には雑誌『性

### 福岡武男 略年表

- 一九四六 慶應義塾大学医学部在籍（学生時代より性に関する研究に関心をもつ）
- 一九四六 東京・向島の文化協会（設立福岡武男、会長五十嵐喬（中央大学教授）で文化運動として性の問題を扱う保健研究室を中年婦人と開始。大衆運動の開始。科学的根拠をもつ「国民の純潔教育・浄化運動」をはじめ。福岡整形外科医院を開業しながらのこと。
- 一九四六 東京・墨田地区女子青年会で講演（五月一日～二日）以後保健教室と女子青年会で地元青年会で六ヶ月の講習を開始
- 一九四六 NHK放送に出演（青年の座談会『性と青年』）
- 一九四六 八月末 性科学研究所を設立（青年会協力）（NHKの反響により）
- 一九四六 十一月三日 NHK放送に出演（内容：青年運動としての性教育）
- 一九四七 全国性科学運動青年大会を主催（中央大学講堂にて、聴衆二千一人）
- 一九四七 七月末 日本性教育協会設立（呼びかけ人。会長永井潜）
- 一九四七 十一月一日 日本性科学会設立（主要メンバー）
- 一九四八 一二月 墨田地区で各団体が中心に性科学普及協議会を設立（主要メンバー）
- 一九四九 著書『性の新しい認識と倫理—性生活読本—』家政教育協会（当時性科学研究所所長・日本性教育協会普及局長）六二〇回あまりの講演と雑誌に一年連載したものをまとめたもの。
- 一九五一 高橋鐵・福岡武男・竹山恒寿・山本杉・阿倍静枝「若い人たちの性愛トラブル」『人間探求』一九号、八四～一一八頁
- 一九五二 回答者「夫婦生活の上相談室・夫には絶頂感を装うだけ、私は自慰にしか歓びを感じない（相談者山岸いと子）」『夫婦生活』一号、一八四～一八五頁 など回答者としては他多数
- 一九五四 二月十三日 日本性学会発表（当時日本性学会幹部）
- 一九五四 三月四日 くも膜下出血のため逝去（行年四九歳）
- 一九五四 著書『キンゼイ報告と日本女性の性行動』春陽堂書店

教育』（性教育普及会）、『性科学研究』（性科学研究会）、一九三九年には『正しい性教育（改訂版）』（G・D・オールズ、教文館）も発刊されている。性科学、性教育は、一九三〇～四〇年代には、第二次世界大戦期の優生思想、純潔教育と深く結びついていくのであつた。

福岡武男氏が性教育運動家として活躍した一九四〇年代、五〇年代は、医療技術が急激に発達した時代でもあつた。四〇年代には一般の医療機関でもレントゲン撮影が身近なものとなり、「科学的に身体内部を知る」ことが普及した。徐々にホルモン剤

が使用されていた時代でもある。また一九四九年には日本で初めて非配偶者間人工授精が実施され、世間の大きな関心を浴びた。

一方で、貧困層を中心にした産児制限、性病、売春の問題もあった。公娼制度は一九四六年に性病の蔓延を理由にGHQによって廃止されたが、いわゆる「赤線」に集娼されて事実上の公娼があった。この時期、婦人運動を核に廃娼運動が盛んにおこなわれる。関連著作も多く出版された（例えば『戦後日本の売春問題』神崎清、社会書房、一九五三）。売春婦を一方的に取り締まる形で売春防止法が制定されたのは、福岡武男氏没後の一九五六年、施行は一九五八年のことであった。

福岡武男氏が生きたのは、「色街」でも有名な向島であった。川向この遊郭・新吉原（現在の台東区千束）には花魁が、ここ玉ノ井（現墨田区東向島）は私娼街で淫売がいた。そのような地で彼らに医師として触れ、語った氏が性教育運動に傾倒していくのは容易に理解ができよう。おりしも、婦人運動として性教育、産児制限論、廃娼運動が叫ばれた時代であった。『産児制限の研究』（安藤畫一・編、日本臨牀社、一九四七）、『性科学』（太田典礼、三笠書房、一九四八）が発刊された時代である。福岡武男氏は、開業整形外科医でありながら、地元青年会に請われて性教育の講師をはじめめる。NHK放送にも出演し、婦人雑誌では性に関する悩みに回答する医師でもあった。

大衆運動に深く傾倒する一方、福岡氏は経験的なデータを集めて性科学を実証的・科学的に研究しようとした。実際に町で調査を実施し、性に関するデータを実証的に集め、自宅医院に性科学研究所を設立、日本性教育協会・日本性科学会・性科学普及協議会の発起にかかわったのであった。本復刻の前半『性の新しい認識と倫理——性生活読本——』は、こうしたなかで福岡武男氏が六二〇回あまりの講演をおこなった内容をまとめたものである。

かの『キンゼイ報告 人間に於ける男性の性行為（上下）』が邦訳出版されたのは一九五〇年（永井潜・安藤画一訳、コスモポリタン社）であった。福岡氏が敬愛した永井潜氏の翻訳だから、おそらく福岡氏自身も原著を熟読したであろうが（原著一九四八年）、これは彼や日本の性科学・性教育のその後の方向に影響しただろう。同じ『女性篇』も原著で読了しただろうが（原著一九五三年）、その邦訳をみることなく彼は逝ってしまった（邦訳『キンゼイ報告 女性篇 上下巻』一九五五）。

もう一人、彼に大きく影響を与えたと思われるのは、前述の永井潜氏である（一八七六一—一九五七）。彼は、生理学者で東京帝大医科大学教授で生理学に物理化学の理論・実験技術を導入した学者であるが、優生学・人類遺伝学に通じ、性教育、人口問題にも発言した。一九二三年には、日本性学会を設立・会長就任、一九三〇年には日本民族学会会長をつとめ

ている。氏の学問的主題は生理学者の立場から、生命・性など人間の根元に関する探求であり、それは性教育、民族の優生問題へと広がっていった。究極的には「性は生、性は聖なり」という宗教的境地にいたったという。福岡武男氏は、永井潜氏をたいへん尊敬していたというが、おそらくこのような学際的探求心、「性は生、性は聖なり」という態度に由来していたのだろう。永井氏は一九三九年に『結婚読本』（春秋社）を公刊している。

本復刻本後半におさめられた福岡武男氏の遺稿『キンゼイ報告と日本女性の性行動』の永井氏序文によれば、『キンゼイ報告と日本女性の性行動』発刊後、男性篇に取り組む予定であったという。まさに志半ばで無念であったろうが、性教育に対するその志は妻・福岡光子氏が受け継いだのであった。

#### 参考文献

- 赤川学、一九九九、『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房  
白井千晶、二〇〇四、「男性不妊の歴史と文化」『不妊と男性』青弓社、一五一〜一九二頁

## 復刻によせて

福岡 光子

早いもので、武男が一歳六ヶ月の一人息子・一樹かずきと私を残して逝ってしまつてから、もう五二年になるうとしています。今ごろあなたは、諸先輩、友人と性教育について熱い議論をしているのでしょうか。

福岡武男たけおは、軍医で医学博士の福岡佐次郎さじろうの子どもとして生まれ、慶應義塾大学医学部に進み、赤坂の前田外科病院で研修し、また同病院で後輩の指導にあたりました。初代院長前田友助ともすけ氏（慶應義塾大学整形外科教室を開設・初代教授、一九二二〜二八年）の教えを受けました。整形外科が一般的でなかった時代、「復形外科（現・形成外科）の父」と呼ばれた前田院長の元で学んだことはたいへん大きな幸せでした。前田院長は、福岡佐次郎の支援を受けたとのこと、福岡とは長いおつきあいでした。

私事ですが、私は向島で開業していた産婆・大塚スエノの二代目助産師です。小さな頃から女性の妊娠・出産・育児を見てきた私は、二十代の頃、この向島という土地の性教育に関心をもち、女子青年会団長だった私は、福岡武男氏に性教育の講演を依頼したのでした。当時、整形外科はほとんどありませんでしたから、福岡整形外科は地方遠方からの多くの患者さんであふれて多忙でしたが、快く熱心に講演してくれました。それを聞きつけて、整形外科医院の方に、夫婦で性の相談に来院する方もありました。

性教育の講演や研究には、本当に夢中になっていました。「こんなに性科学や性教育が遅れているなんて」と始終口にして、使命感に燃えていました。また、医学界では当時、自分が世話になった分、徒弟をとつて経済的支援をすることがめざらしくありませんでしたが、武男もいつも何人もの徒弟や親戚を住まわせていました。開業する整形外科医院の職員の住み込み、性科学研究所の職員と、いつも多くの方々みなさんに囲まれて、忙しくしていました。

町にでて他の方々みなさんと性科学の調査をしたり、講演活動をしたり、婦人雑誌の相談者をつとめたり、テレビに出演したり、性教育活動、整形外科医院の業務と座る時間もなかったようですが、執筆活動は楽しかったようです。同じ寺島尋常こうだろはん小学校の同級生で幸田露伴こうだろはんの一人娘・幸田文あやさんが自宅に来て、よく文学や文章の話をしていました。武男の文章が上手いとか下手とか、夜遅くまで二人で、時には私も含めて三人で、よく話し込んだものでした。夜明けまで話して人力車でお迎えが来たり、私たち夫婦に息子が生まれてからは、夜が更けてくると私は「先に失礼するわね」と退座したりしたことを懐かしく思い出します。

そんな武男が四八歳という若さにして、くも膜下出血で逝ってしまったのは、一九五四年三月四日のことでした。結婚して十年近く、やっと授かった息子・一樹が一歳六ヶ月の時でした。何もわからない一樹が葬式の席ではしゃぎ、親友の方丈さんが泣いて読経でできなかったことが忘れられません。武男の本に寄稿してくださった永井潜<sup>ながいひそむ</sup>先生、古沢嘉夫<sup>ふるさわよしお</sup>先生はじめ多くの男性方が声をあげて泣いていました。

私財をなげうって院内に性科学研究所を設立していましたから、家が何軒も建つぐらいの借金が残りました。私はさらに借金をして有床の助産院を福岡の地にかまえ、武男の父母や助産院の職員に助けられながら、出産の介助をし、息子を育ててきました。今、武男の息子は産婦人科医として多くの女性を助けています。

私とはいえば、その間、少しでも武男の志を継ぐべく、この五十年以上、妊産婦さんの性教育をしてきました。「性教育は生教育」、武男は亡くなってからもいつも私の伴走者であってくれたと思います。武男が遺稿を記してから半世紀がたちました。社会は大きく変わりましたが、「生教育」に人生を捧げたともいえる故人の遺志を残すため、ここに復刻することにいたしました。